

論 文

# 日本現代文学における〈悪女〉という表象

孫 于 恵

広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期

## Representation of “Villain” in Japanese Contemporary Literature

SUN Yuhui

**Abstract:** There are so many words related to “bad woman,” such as a witch, a little devil, a femme fatale, a poisonous woman, a playgirl, and a lewd woman. Indeed, the “villain” is a subject of criticism, but it is not the only one. Rather, “bad woman” is a representation that has fascinated both men and women (Chinami Kasama, 2012. “Body representation of ‘bad woman’ and ‘good woman’”). For this reason, episodes related to “bad woman” are always in abundance and have been repeatedly adopted as the subject of TV dramas, movies, visual arts, and novels.

What, is a “bad woman” or the condition called “bad woman?” With these questions as a starting point, this essay will transition the word “bad woman” and discuss the expression of “bad woman” in contemporary Japanese literature.

**Keywords:** bad woman; conditions; the charm of a villain; the literary transition of the villain

### はじめ：

妖婦、魔女、小悪魔、ファム・ファタル（宿命の女）、毒婦、プレイガール、淫婦……。 「悪女」に関連する言葉は実に多い。確かに「悪女」は非難の対象だが、それだけではない。むしろ「悪女」は男だけでなく、女までも魅了してきた表象である（笠間千浪. 2012. 『〈悪女〉と〈良女〉の身体表象』）。だからこそ、「悪女」にまつわるエピソードには事欠かず、テレビドラマや映画、視覚芸術、小説の主題に繰り返し採用されてきた。

一方の「良女」という言葉は造語であり、不思議なことに「悪女」の対義語は意外と少なく、聖女、貞女、淑女くらいしかない（笠間千浪. 2012）。なお、聖女とは、「清純高潔な女性。特に宗教上の事柄に身を捧げた女性」（『広辞苑』第五版）であり、宗教的な意味合いが強い。貞女とは女性が性規範的

に守るべき貞節に従順な女性であり、淑女は品位のある女性をさすので階級の上層の意味を含む。これに対して、「良女」は「教科書」的に正しい女性である。つまり、性別に関する教科書ともいえるジェンダー秩序、とりわけ性規範に従順とみなされれば「良女」とされ、背いていると判断される女性（像）が「悪女」とされるのである。

「悪女」の主な性格については、妖艶、好色、淫らなどの言葉が使われ、「色仕掛けで男を惑わす」存在というのが代表的なイメージだろう。だが、日本の文学では鎌倉末期から「悪女」の語が現れたが、はじめは「美女」の対義語、つまり「醜女」の意味で使用されていた。しかし十七世紀初頭になると、「身持ちの悪い女」という意味が登場する。女性に対してだけ貞操強いられるようになったのは、中世後期にあたる戦国期以降のことだという（田端泰子、2005.「中世の「悪」の観念と〈悪女〉」。「悪女」への意味付けも時代とともに変化していることがわかる。現代に至って男を惹き付けてやまない「魅力的な女」と掲出されている（『日本国語大辞典』）。醜女の意味はほとんど姿を消しているが、もう少し異なった要素が付け加わった。では、その要素というのは一体なにだろうか。本タイトルでは、「悪女」ではなくて〈悪女〉、ちゃんと〈〉をつけていることは、従来の「悪女」という言葉の持つ意味に疑義を差しはさんでいる私見である。

では、〈悪女〉というの一体なになのか、または「悪女」と呼ばれる条件はなにだろうか。これらの問題を出発点として、本研究では「悪女」という言葉の変遷からお話し、現代日本文学における〈悪女〉の表現について論じていくと考えている。

## 1. 「悪女」という言葉の変遷

「悪女」とは、「悪」い「女」と理解する方は多いだろうが、実際にはどうか。本節ではまず、「悪女」に関する一般的に使われている辞書から意味や関連用語の解説を取り上げ、言葉の変遷から検討する。

### 1.1 悪女に関する定義の整理

『国語大辞典』（1982）

- ①容貌の醜い女、醜女。
- ②心の悪い女。性質のよくない女。
- ③悪意を秘めた魅力的な女性。

男を手玉に取る女。(2000年追加)<sup>1</sup>

男を魅了し、墮落させるような小悪魔的な女性。(2006年追加)

『大辞泉』(1995)

- ①性質・気だての良くない女。  
②器量の悪い女。醜い女。<sup>2</sup>

『広辞苑』(1998)

- ①性質のよくない女。  
②顔かたちの醜い女。醜婦。<sup>3</sup>

『大辞林』(1999)

- ①性質のよくない女。  
②容貌の醜い女。<sup>4</sup>

『新明解国語辞典』(2005)

- ①醜女。  
②男を色香で迷わしかねない女。(2005年追加)<sup>5</sup>

## 1.2 悪女の用例整理

### 1.2-1 「容貌の醜い女」を現す表現

① 用語——「美女は悪女の敵」(「びじょはあくじょのかたき」)

用例：①(前略)美女は**悪女**の敵(かたき)とかや、片方の妬ふかうして、あらぬ讒難を申しかけ候へども(後略)…(仮名草子集『露殿物語』1979-57)

用例：②「伝曰、女無二美悪一、入<sub>レ</sub>室見<sub>レ</sub>妬(略)美女**悪女**之仇、豈不<sub>レ</sub>然哉。」(『世俗諺文』に収録された「史記-外戚世家」)

解説：世の中に美人がいるため、醜い女性はさらに肩身が狭く、不幸な目にあうと思い、美女を目のかたきにすること。(『日葡辞書』1603-04)

② 用語——「悪女の深情け」(「あくじょのふかなさけ」)

用例：①「**悪女**の深情ともいへば其深き情に染て奥行を味ふべし」(洒落本・傾城諺種1791)

②確かに関係がありました。いわゆる**悪女**の深情けで、女の方はもう夢中になっていたんです。(岡本綺堂『半七捕物帳』1923)

解説：美人は多くは情が薄く、醜い女はかえって情の深いこと。醜い女が、好きになった男に度を越した愛情をかけること。また、その愛情。

③ 用例：「当腹二人は、ことの外**あく女**なり。」(『曾我物語』南北朝頃)

### 1.2-2 「性質のよくない女」を現す表現

① 用語——「悪女の賢者ぶり」(「あくじょのけんじゃぶり」)

用例：「それは**あく女**のけんしゃぶり、または、こつじきのだんじきと云物なりとぞ申ける。」(仮名草子・長者教1627)

解説：心の悪い女が賢人のふりをして外見を装うこと。餓鬼(がき)の断食。乞食(こじき)の断食。

② 用例：「新将軍御台〈日野姉也〉、被<sub>レ</sub>出二御所中一。自<sub>レ</sub>兼不快之故也。**悪女**也云々。」(『大乘院寺社雑事記』1482)

### 1.2-3 「魅力的な女」を現す表現

① 用例：『イブ』——『**悪女イブ**』(1964年邦題)

解説：ハドリー・チェイスの代表作『イブ』は邦題が『**悪女イブ**』とされ、出版社よりそれぞれの内容紹介ところには、「…そこへ登場した魅力的な悪女、その名をイブ…(創元推理文庫1963)」、「魔性の魅力的な女の虜となった男が迎える悪夢のような末路をノワール小説界の雄、チェイスが鬼気迫る筆致で描いた傑作。(東京創元社2018)」と書いていた。

② 用語——「**悪女**の魅力」

用例：「雑誌で、あなたも悪女になれるか、とか、悪女の魅力解剖、みたいな特集やっとなつたが…」(中島梓『人間動物園』1981)

#### まとめ：

以上にまとめると、辞書での「悪女」はほぼ「性質・心のよくない女」、あるいは「醜女」の解釈を含まれている。しかし、下線が引いているところの解釈から見ると、近現代の「悪女」は「魅力的であり、男の心を惑わす女」という意味などで新たな定義を加えられていることで、男と関連する上で魅

力的な女というニュアンスが含まれている気がする。

一方、同じ漢字圏の中国にとって、「悪女」という言葉を口にすると、すぐに「悪い女」と理解する人は多いだろうが、『中国現代漢語辞書』を引くと、「悪女」に関する定義はただ「容貌の醜い女」という解説であり、逆に「悪婦」という言葉で「悪い女」と解説された。中国の文学史をひもとくと、悪女を描く際にも「悪女」という言葉が使われるのはまれで「悪婦」が圧倒的に多い。中国の歴史をさかのぼると、則天武后と慈禧も同様に「悪女」の名と付けられたが、二人の「悪」は主に人間作りと問題処理に現れたと言われている。そうすれば、二人の「悪女」という言葉を日本語で解釈したほうが、君主の象徴がはっきりと伝わるようになる。これらの東洋文化における「悪女」の定義とは対照的に、西洋文化での「悪女」はすべて暴力、残酷で有名である。1964年出版された『世界悪女物語』（澁澤龍彦、桃源社）には、西洋の11名の「悪女」と呼ばれる女性を取り上げ、彼女たちはただ「陰険、残酷で、「悪女」と名付けられた」と澁澤氏が述べた。

日本側に「悪女」について、「男を色香で迷う」、「男を魅了し、墮落させる」などが新たな定義として追加され、近現代の社会背景と多少に繋がっていると筆者が考えている。こういう意味では、辞書における語義の解釈も近現代の文学創作や人々の日常的な使用状況と関係があると推測できよう。2005年に「悪女研究所」<sup>6</sup>の悪女討論グループは「悪人」、「小悪魔」、「毒婦」と「悪女」のいくつかの紛らわしい概念の言葉を分類して再びに定義した。特に「悪女」については、

男女平等を強調せず、特定の男女差別を利用して社会活動を考える女である。自分の行為に忠実で、周りのすべてのものを利用して自分の目的を達成する女性。悪女はいつも自分の基準で物事を判断するので、道徳や倫理に反する行動をとる時にもある。(2005)

と辞書的（2005年当時）意味よりもっと包括的に解釈された。悪女研究所のようなシンポジウムの出現のみならず、日本の近現代文学作品における様々な悪女のイメージや関連資料が大衆の視野に現れと伴い、人々が「悪女」というイメージに対する認知をより立体的で、逆に辞書における悪女という言葉の定義を補充した。

## 2. 近現代における「悪女」の文学的変遷

### 2.1 文学作品に登場する「悪女」

では、「悪女」の意味変遷は文学にどのように表してきたか。ここで「悪女」という言葉を含む、あるいは作品の中に「悪女」が出てきた近現代の文学作品を取り上げ、文学的な「悪女」の意味やニュアンスより分析してみる。まず、時間流により近現代の作品の中に出てきた「悪女」を整理する。

① 大下宇陀児「悪女」（1937年に『サンデー毎日』に掲載された。）：

ここでの悪女は女給を指すが、当時の社会背景を含めて考えると、夫婦に見込まれていたので別に「魅力的な美女」だったわけではない。しかし、結果的に不幸な結末を招いた女中の出来心が腹黒かったわけではないので、女性が抑圧されていた時代だけになぜか哀れを誘った。

② 太宰治『畜犬談』（青空文庫1939）：

「…どんな悪女にでも、好かれて気持の悪いはずはない、というのはそれは…」という描きが出た。本物語に登場した悪女像は「心の悪い女」というニュアンスを強調している。

③ 田中澄江『悪女と眼と壁』（京都日日新聞1945）：

男の求める「可愛い女」的なところの少ない女性は「悪女」というレッテルを貼られることが多いと指摘した。そのことまでもはっきり見定めた上で「悪女」という表現を使うならば、下世話的な「悪女」という言葉も、男女両性の闘争という根源的なテーマの次元に高められることになり、そのものずばりという形で描いたテキストである。

④ 橋本夢道『無禮なる妻』（未来社1954）：

俳句集である。この第一句集に次いで、「良妻愚母」、「無類の妻」と刊行された。題名の変容ぶりだけで十分に察せられると思うが、「照れ」で「無礼」と言ったまでである。

⑤ 石川達三『悪女の手記』（新潮文庫1956）：

小説は人格者とされる男の私生児（主人公の私）として生まれ、その男は自分と母親を捨て、自分は母のようにはならないと誓って生きて来たのに、結局は初めて愛した男に捨てられ、その時にはお腹に子供がいてまた自分が私生児を産むという物語である。そこの立場だったら自分は母のような「悪女」となるかもしれない。本書での主人公は自分に挑んで来るものと戦えたが、向けられる優しさや愛情を前にすると戦えなくなる気持ちがすごくよく分かる。

⑥ 小池真理子『知的悪女のすすめ』（角川文庫1981）：

小池真理子のデビュー作として知られている。男性に都合の良い社会の中で、女性として表面上は従っているように見せつつ賢く生きている女を描いた。悪女は姿も素敵だが、本質は「生き方」にあり、「野生的文化人」とまとめている。本書では伝統的定義への疑義も見られる。「悪女」という言葉のなかには、一種独特の神秘的含みがあって、「君は悪女的なんだな」と言われると、女の心が打ちふるえるのも事実であると小池真理子が論じた。作品にある「悪女」とは、単に男を惑わしたり、奸計にたけている女のことでない。逆に言えば男の手玉に乗ったふりをしながら男をうまくコントロールできる女、常識やモラルにストレートに反抗するのではなく、裏道を通りながら反抗する女ということである。要するに、「知的悪女」はこれからの新しい女であると指摘した。

⑦ 中島梓『人間動物園』（角川文庫1981）：

「…雑誌で、あなたも悪女になれるか、とか、悪女の魅力解剖、みたいな特集やとったが…」という描きがあり、ここでの「悪女」は辞書的の「醜い女」や「心の悪い女」という意味ではなく、魅力的な女を強調している。

⑧ 八切止夫『おねねは悪女だった』（日本シエル出版1981）：

寧々とは豊臣秀吉の妻であり、彼女は悪女かどうかは別にして、鉄幹の妻ということは、八切止夫が注目されると思う。

## ⑨ 有吉佐和子『悪女について』（新潮文庫1983）：

本書では「良い悪女」という表現が出た。「…ママが悪女だなんて、とんでもないよ。ママは夢のような一生を送った可愛い女だったんだよ、本当だよオ…」と最後に結論が出た。小説では「自覚の無い悪女」という言い方が出てくる。「隠れ悪女」は、自覚はある悪女ということになるのが言えよう。

## ⑩ 安西篤子『男を成功させた悪女たち』（集英社文庫1983）：

本書では「悪女」の定義にふれていることを注目した。「悪女たち」は「男を成功させた」女ともみなされると安西篤子が述べた。ここでは駒田信二の解説から引用してみる。

…いわゆる悪女は、ほんとうの悪女ではない、ということである。あるいは、悪女を悪女にしたのは男性だということである…ただ、いわゆる「悪女」たちは、一般の女性よりも自我が強かったり、多情だったり、奔放だったり、嫉妬ぶかかったりしただけではないか…自我が強かったり、多情だったり、奔放だったり、嫉妬ぶかかったりするとは、当然男性にもある。男性の場合はそれが「悪」とされることはほとんどないのに、女性の場合は「悪女」といわれる。…

## ⑪ 大林雅子『悪い女かしら——私の幸せがしの旅』（イーストプレス1991）：

大林雅子は上原謙のはるかに年少の後妻として、親子でも年の離れたほうみたいな感じなので、夫婦関係では何があってもだんなのほうの責任だと唱じている。魅力的という意味よりは、やや文字どおりの意味に近いのかもしれない。『悪い女でごめんね』が翌年、同じ出版社から出た。『悪い女でごめんね』には自分が悪い女というのは認めてしまったが、「悪女」＝「わがまま女」イメージが強かった。

## ⑫ 安西篤子『歴史を彩った悪女、才女、賢女』（講談社文庫1995年）：

本書にはまえがきやあとがき、解説などはなし、定義も見当たらなかった。しかし、才女、賢女と並んで、「悪女」に対して好意的なのは確かに提唱した。

⑬ 『蒼いおんな』——『悪女』（1999年改題）：

団鬼六の官能小説『蒼いおんな』（1982年に東京三世社より出版）は、その名も『悪女』（上・下）と幻冬舎アウトロー文庫（1999年）より改題された。富豪の家に嫁いだ若い妻が、その家族の淫らな陰謀にはまり肉体をオモチャにされていく姿を描く小説だが、若い妻の姿に関する描写を大量に用筆し、周りの男性を色香で惑う魅力を溢れている。

⑭ 三枝和子『ギリシア神話の悪女たち』（集英社2001）：

「はじめに」から悪女の定義に目を向け、いい意味で使っていると指摘した。本書はこうした観点から、これまでのギリシア神話を、裏通りから眺めた試みであり、悪女って何？と問い返した。「どうも、強い女、男たちに影響力を持ち、これを支配することのできる女を、男たちは悪女と言おうとして来たようだ。それが男なら英雄という称号を貰ったにちがいない女たちだ」と指摘した。

⑮ 森永卓郎『悪女と紳士の経済学』（日経ビジネス人文庫2001）：

第三章「恋愛市場の規制緩和」で「悪女はささやく」という小見出しがあるが、その直前の「魅力度の研究」の最後あたりから悪女が登場した。それぞれを引いてみる。

魅力的な女性のタイプは、天使のような女と悪魔のような女の二タイプに集約される。普通に考えれば、天使のような女がいいに決まっている。しかし、不幸に陥るのが見えているにもかかわらず悪女を追いかける男が多いのは、悪女の持つ妖しい狂気が、とてもない魅力を持っているからであろう。しかも、悪女たちの妖気は決して生来のものではなく、過当競争とロイヤリティという、きわめて高度な恋愛技術に裏打ちされたものなのである。

一九九三年の暮れの朝日新聞に「悪女はささやく」という連載が八回にわたって掲載された。悪女のライフスタイルを紹介したということに、日本人の価値観が変わってきたことを予感させるものがあつたと森永卓郎が指摘した。

## ⑩ 内田聖子『雀百まで悪女に候』（健友館2003）：

自由民権運動で投獄された福田英子の伝記であり、本書での「悪女」は犯罪者のことと表す場合が多い。

## ⑪ 鈴木紀子 野村幸一郎 林久美子『〈悪女〉の文化誌』（晃洋書房2005）：

京都橋大学女性歴史文化研究所叢書である。日本語の「悪女」は、鎌倉時代に登場し「醜女」の意味だったと、「身持ちの悪い女」という意味は、南蛮人襲来の「日葡辞書」から引用したと指摘した。中国では、紀元前1世紀の「列女論」に悪女が登場したが、「妬婦」、「淫婦」と定義された。前者は「嫉妬という感情で激しく自己主張する女性」、後者は「他の男と通じることで、夫と同じ立場に立つか、規範そのものを無視する女性」ということも論じた。様々な悪女が登場したが、批判もコメントも言及しなかった。「人は何故、善よりも悪、善良な女よりも悪女に惹かれるのか」という人間性の根本に関わる心理学的アプローチがあればさらに万全になっていたと思われる」と述べたが、「悪女」の定義もはっきりしていなかった。

## ⑫ 石原加受子『邪悪な人を痛快に打ちのめす！』（こう書房刊2007）：

第6章である「邪悪な人に勝つために、悪人・悪女を見做おう」には、悪人・悪女が自分を「特別な人間」だと思って、「人が私を特別扱いするのは、当然でしょ」「俺が一番偉いんだから、当たり前だろ」そのような感覚であると述べた。悪女というのは、ストレスなどを知らない女として、自分の感じを強調すると指摘した。

## 2.2 文学研究者からみる「悪女」

## ① 高見順『悪女礼賛』（酒井書店1956）：

（前略）男を酔わさない、男をだまさない女は一品料理のごとくつまらない。私は悪女ということを考えているのである。私のごく親しい人に、悪女か悪女的な女にしか惚れないという男がある。いや、惚れた女を、きまって、悪女にするとやったほうが正確だ。

よくしたもので、悪女にされた筈の女が、他の男と恋愛しているうちに、悪

女でなくなるのではないか。悪女にはなかなかないものだとすることを知らされるのである。悪女は美しいだけではないが、悪女ほど美しいものはない。(言うまでもないが、この美しいは、美貌の意味ではない)「生きることに強い」「生きることに熱心な」悪女が、とことんまで男というものを知ろうというその強い精神、一種の求道精神にも似たその恋愛精神というものを考えるのである。

② 澁澤龍彦『世界悪女物語』(桃源社1964、河出文庫1982)：

『世界悪女物語』と題名であるが、ルクレチア・ボルジアからマグダ・ゲッペルスまでの12名女性の中で、東洋の「悪女」像が則天武后一人しかなかった。その点について澁澤龍彦は、「悪女物語」に名前をつらねるには、男性を顎でつかい、一国の運命を左右するほどの輝かしい悪事を積み重ねた、堂々たる女傑でなければならないはずである」と解釈した。「悪女」とは、美貌と権力によって悪虐のかぎりをつくした女性、あるいはまた、愛欲と罪悪によって身をほろぼした女性と考えておけばよいだろう。なかには、この定義にはずれる女性もいきとだろうし、むしろ可憐と呼びたいような生一本なところを示した女性もいるかもしれない」と指摘し、定義にこだわる必要はないだろうと述べた。

③ 楠本憲吉『悪女のすすめ』(山王書房1968)：

楠本憲吉は本を基に、悪女のあり方を定義した。本書では「状況に応じて対応できるのが悪女」、「話し下手の人からうまく話を引き出し、また逆に、話したがりがだけ場をわきまえない人を、うまく抑えられるのが悪女」、「ついつい金を使わせるのが悪女」、「よく使わせるテクニックのあるのが悪女」、「暗い悪女もないだが、異性の相性は補完的なものが悪女」とまとめた。

④ 駒田信二『世界の悪女たち』(文春文庫1985)：

「歴史は男だけが作ったわけではない。国が滅び、城が傾く背後には、しばしば、美しく怖い女たちがいた」と前書きの部分から、古今東西の42人の悪女列伝を記載した。ここではあとがきの「悪女観」を引く。

私は、ここにその略伝を語った「悪女たち」を、辞書にいう「悪女」の意味で選んだのではない。…そういう、いわば「偏見」から選んだのであ

る…勿論、「性質のよくない女」とか「顔の醜い女」とかいうだけの「悪女」は、私の「悪女たち」の中には一人もいない。だいいち、そんな程度の「悪女」は私にとってなんの魅力もないからである。

⑤ 大笹吉雄『三島作品の場合』（1989）：

…そもそも「悪女」なるいい方は男性社会が生み出したものにほかならぬだろう。つまり、悪女とは、男にとって悪い女という意味であって、女にとっての悪い女は意味していないと思われる。そして、悪女といういい方には、なにがしか可愛い女、愛すべき女というニュアンスが含まれているのが普通で、女の魅力がない時は、そう呼ばないのが慣わしだといっているのではあるまいか。

⑥ 岩淵達治「“悪女” 様々な意味」（1989）：

…「悪女」の意味を別の角度から見て、「悪」を体現する女、魔性の女と考えると、この悪女は、相手を（必ずしも男性とは限らないが）破滅させる存在となる。この場合にも、どういう基準で「悪」という判定が行なわれているか留意する必要がある。またその人が生来の「悪女」なのか、状況や環境によって「悪女」になったのか、ということも問題になるだろう。

⑦ 植島啓司「かわいい女から「悪女」へ」『FRAU』創刊号「悪女特集」（講談社1991）：

まずは冒頭の記事から引用する。

どうも男はだれでも「悪女」という言葉に魅力を感じてしまうようだ。悪女の実態といえど千差万別であろうが、男の思う通りにならない女、または、なにを考えているのか心の底が見えない女とでもいうのだろうか。…あたりまえのかわいい女はつまらない。もっと男を裏切ったり、手玉に取ったり、ウソをついたり、誘惑したりする女が魅力だろう。

⑧ 田中貴子『悪女論（1992）』：

…性格も悪く、男性に尽くすところか逆に翻弄してしまうような「運命の女（ファム・ファタル）」的女性像ですが、別れようとするとき急に打って変わった可愛い態度を見せるので別れられない、ということでしょう。こ

の場合の悪女が醜女では話にならないわけで、性質が悪くとも大いに魅力的な部分がある、というのが現代の悪女ということになります。

⑨ 山崎洋子『歴史を騒がせた「悪女」たち』（講談社文庫1995）：  
悪女はどうかについてはあとがきの内容を引用してみる。

辞書を引くと「容貌の醜い女、性格の悪い女」とある。へえ、と意外に思われる読者も多いことだろう。わたしも思った。…一般的にいう「悪女」という言葉には、男を惑わせる魅力的な女、というイメージがあるからだ。ついでに言えば、謎めいている、頭がいい、決然としている、という意味合いも含まれている。単純で気弱の頭の悪い女は、悪女の名にあたいしない。

むしろ悪女には、残忍、冷酷、意地悪、という要素も、ないわけではない。だが、それでもいい、魅力的ならば、と男も女も胸ときめかせてしまう……そういう存在が悪女なのである。

⑩ 桐生操『優雅で残酷な悪女たち』（大和書房2001）：  
「あとがき」のところにはやはり定義についての考えを論じた。以下のように引用する。

「悪女」という言葉に、あなたはどんなイメージを思い浮かべられるでしょうか。怪しい魅力で男たちを手玉にとる妖艶な浮気女、あるいは所有欲・性欲・権力欲など、飽くことのない欲望に忠実過ぎて、他の人間が傷つくことなどものとしない、奔放な女のイメージでしょうか？

こうして考えてみると、どうも悪女と呼ばれるような女性は、良きにつけ悪きにつけ周囲のものを惹きつけ惹き込まずにはいられない、強い吸引力や影響力のようなものを持った存在であるようです。

その力とは、ときに男を魅了してやまない魔性の魅力として表れるかも知れません。あるいはその激しい感情が嫉妬や欲望というかたちで吹き出し、日頃の行動からは想像できないような残酷な一面をあらわにすることもあるかも知れません。

いずれにしても、人が誰かを「悪女」と呼ぶとき、そこには何処か、ある種の抗いがたい魅力を感じている気持ちがこめられているような気がします。きっとあなたも、ただ単に大嫌いなだけの女性や、何の魅力もない女性のことを、あえて「悪女」とは呼ばないでしょう。

## ⑪ 桐生操『世界悪女大全』（文藝春秋2003）：

冒頭に「願望的悪女と実在の悪女のあいだ」から、「女性の書く悪女像で、やや被害妄想的で（略）伝統的な悪女に近いほうを、むしろ理想化している」と述べた。あとがきを引用してみる。

…「悪女」というのは、どちらかというとなりが造ったイメージ先行の悪女です。そういう悪女は、だいたい美人でセクシーで適度に頭も良くて、魅力的な女性であることが多い。…でも、本当の悪女というのはそんな生易しいものではない。…本当は、どんな女性の中にも、「悪女」は存在しているのです。けれど…裸の自分に忠実に生きようとする、どうしてもある程度は、女は「悪女」にならざるを得ません。女はその点、出発点から男より不利な立場にいるわけだから、初めから失うものがない。…そこでそういう大胆な行動に出る女を、世間は規格から外れた女として「悪女」と呼ぶわけです。

## ⑫ 三宅孝太郎『「悪女」はこうして生まれた』（ちくま新書2003）：

「あとがき」が全般的には客観的でなければならぬにもかかわらず、ほぼ男の主観に左右されることを付記している。内容を引用してみる。

まず断っておきたいのは、ここでいう「悪女」は文字どおりの悪い女を指さないことである。…「悪女」には、条件がある。

絶対条件は美貌、それも男を魅了してやまないセックス・アピールがあること。そのうえ行動力があり、頭もよい。ただし、教養は問わない。鼻先に教養をぶらさげたようなのは、「悪女」たりえない。…性的魅力に飛んだ美女に、さんざん振り回されたあげく、「はい、それまでよ」と言われてしまった男が、「あの悪女めが」と悪態をつき恨んだとしよう。ところが時間がたってみると、「あれほど魅力的な女はいなかった」としみじみ思い知らされる。そんな女こそ、ここでいう理想的な「悪女」なのである。

## ⑬ 堀江珠喜『男はなぜ悪女にひかれるのか——悪女学入門』（平凡社新書2003）：

「悪女である」ことと「悪女に見える」ことは別物であると論じた。「悪女」については「はじめに」から引いてみる。

「悪女」という日本語には、スパイシーな魅力がある。…「悪女」のイメ

ージについて、[女子] 学生たちにアンケートをしたことがある。…回答で最も多かった「ロングヘアで黒いドレスとタバコがよく似合い、爪と唇は赤く、知的な美女」のイメージにも、絶対性はないのかもしれないが、彼女らがちよっぴり憧れる存在であるとの感触を得た。「悪女」になりたいけれど私には無理」との、微笑ましい答えがあったのも、印象的だった。今の時代、パワフルな「悪女」が、社会のカンフル剤として求められているように思われてならないからだ。

⑭ 鹿島茂『悪女入門：ファミ・ファタル恋愛論』（2003）：

…その出会いが運命の意志によって定められていると同時に、男にとって「破滅を招く」ような魅力を放つ女のことを指すということ。より正確に言えば、破滅することがわかっていながら、いわゆる命さえ危ないと承知していても、男が恋にのめりこんでいかざるをえないような魔性の魅力を持った女のことを「ファミ・ファタ」、あるいは「悪女」と呼ぶわけである。

⑮ 三好徹『妖婦の伝説』（集英社文庫2003）：

…悪評のなかには、本人の責任ではない誤解もあるし、こういうことがありましたと伝える第三者の思い違いやいいかげんな書きとばしもある。これらのデフォルメの要因を差し引いて考えれば、本当に悪かったのは、むしろ男の方ではなかったのかという感じさえしてくる。むろん、彼女たちに罪なしとはしない。しかし、美貌であることは罪ではない。にもかかわらず、それが人びとを狂わせたり悲劇をもたらしたりの結果になったのだ。さらにいえば、こうした出来事は、明治時代の日本では女性の地位が低かったことと無関係だったとは思われない。いまは男女同権だとされているが、女性の立場からすると、建前だけで実情にさしたる違いはないという人もいよう。

まとめ：

「文学作品の最も直接的な背景はその言語と文学上の伝統であり、この伝統はまた一般的な文化環境の大きな影響を受けなければならない」。<sup>7</sup> 上述のように、50年代までの文学作品に現れてきた「悪女」は、「醜い女」や「心の邪悪な女」を形容したものが多かったが、後期になると「悪女」というのはほぼ「魅力的」、「個性がある」などの意味を持つようになり、さらに、悪女に関する文学作品は80年代から数多く登場し、当時の社会に多かれ少なかれつ

なだったのであろう。今日実際に我々が「悪女」という言葉の定義について触れているのも、現在生活している社会に基づいて理解されているのかもしれない。いわゆる、今日にあった「悪女」の概念は、昔の女性たちが生きた時代のものではなく、近・現代的なものであるとは言えよう。たとえば称徳天皇とかは中世からすでに厳しい批判を浴びはじめているが、民間における彼女への評価を決定的にしたのは近・現代だろう。称徳天皇の場合は、戦前は道鏡との関係を「淫乱な女の不幸事」と罵られていたものが、現代ではその反動のように「社会的立場や年齢を超えた純愛」と解する人が多くなっている。<sup>8</sup>このした一見矛盾するようだが、悪女には「本当は純情な女性であった」という全く反対の評価が行われる場合もある。その故、ある特定の女性を「悪女」と称する際にこの言葉が使われている世間一般の現状を前提としなければ納得できないだろう。

### 3. 〈悪女〉の本質にかかわる難問：〈悪女〉とは一体何か？

文学作品にも研究にも「悪女」に対しては様々に論じたが、〈悪女〉とは一体何かという問題はまだ十分ではないと考える。例えば、「悪女」に対して「悪男」、すなわち悪い男というのはどのイメージだろうか、あるいは、「悪女」があつて「悪男」という言葉がないのはなぜなのかなどの問題を含めて考察しないと、「悪女」に関しては少し一方的ではないかと考えていた。

#### 3.1 モラルのダブル・スタンダード

ここでまず、悪女に対して「悪男」、すなわち悪い男というのはどのイメージだろうかを少し検討したい。

そもそも「悪男」という言葉はなく（ただし書名には、渡辺啓助の短篇推理小説集には、『悪男悪女』と加藤登紀子の『悪男悪女列伝』などがあるが、特別な意味はないわけである）、「悪人」や「悪党」は昔からあるが、むしろ法律上の男性犯罪者を表すことが一般的である。同様に、「悪妻」はある一方、「悪夫」はない。では、「悪女」があつて「悪男」という言葉がないのはなぜなのか。男性の眼差しによって計られる悪女と違って、悪男には基準となる尺度がない。たとえば歌舞伎の「色悪」や「実悪」などの用語は美学として確立した「悪」のわけが、悪女の「悪」は常に「誰にとつての悪か」が起点となっている相対的なものと言える一方、悪男が存在しなかった理由は、

女性が社会の中心に位置していなく、思考や言語までも男性のそれを用いざるを得なかったがために、男を計る尺度が成立しなかったことにあるのではないかと推測できる。その故、ある意味で「悪女」は性差別的なことばと言えるかもしれない。

### 3.2 プロの悪女・アマチュアの悪女

要するに、〈悪女〉とは、男（女とも言えるが、ここでは、LGBTの場合には後述にする）との関係の中では生じるものであり、男性側から判断される女であると言えるだろう。一人の女が〈悪女〉になるかどうか、それはあくまで男との組み合わせの問題に尽きると言わざるをえないだろう。

男によって、金銭、地位、名誉、感情などに大に損害した女が悪女と呼ばれるかもしれないが、ここで筆者は、男性側からの判断標準とはなにだろうか、それとも既存損害は片方だけだろうかなどの問題を踏まえて考えると、〈悪女〉とは、①プロの悪女（目的持ちながら男を接近する女）と②アマチュアの悪女（目的なしに男を接近する女）を分けないと混乱になると思う。

- ① **プロの悪女が徹頭徹尾、目的的な存在であり、必ず男性との関係において価値が計られている。すなわち、「悪女とは男性側の価値基準による女の尺度である」。**<sup>9</sup>

このタイプの悪女とはなによりもまず、自らの魔性をはっきり意識していて、それをどれだけ生かしきるかに人生をかけている。プロである以上、男の運命を狂わせ、財産を蕩尽させてしまう結果、金銭という形を男から取って現れるのが当然だが、金銭だけが目的なのではないことが重要である。つまり、プロの悪女にとっては、金銭そのものよりも、金銭へと還元された自分の技倆に対する誇り、または地位とかが大切なのである。

- ② **アマチュアの悪女とは自分の魅力に対してほぼ無意識的である。あるいは意識していたとしても、それを活用して男を弄ぼうと、意図的に振る舞うわけではない。**

このタイプの悪女は①と違い、完全に男性側から判断された女であり、実

際に悪女ではない可能性もある。アマチュアの悪女は贅沢好きで男にむやみにお金を使わせて、マイナス無限大の地獄に引きずり込むが、本人は金銭の有無や権力の持つなどには至って無頓着である。

### 3.3 まとめ

上述をまとめると、〈悪女〉はある特定の関係に存在するものとして定義されていると筆者は考える。例えある男性にとっては女性Aに騙されることは破滅であり、Aを〈悪女〉と呼ぶこともできるが、他の男性にとってはAはただ普通の女性にすぎないかもしれない。次に、〈悪女〉は「男を魅了し、墮落させる」という解釈については、まず人間の人々により、感情的に少しの傷でもくじけてしまう人もいるし、名誉の重傷に負ってしまう人もいて、「墮落する」の尺度が異なることは事実である。そしては、金銭や名誉などを損害しているかどうか男性の視点で判断されることであり、関係中に女性側の損害が出るのではないかということも考えられなかった。最後に、男性に意図的に計画的にアプローチしている女性は別として、ホルモンの作用で男性に引きつけられているだけの女性、あるいは付き合っている際に男性側が自発的にお金を使い果たしてしまう女性も〈悪女〉と呼ばれることは妥当ではないと筆者は思う。

## 4. 〈悪女〉になる条件

絶対的な意味（プロの悪女）での悪女は存在しないのかという問題については、これがいると筆者は思う。なぜなら、もし存在しないのならば、〈悪女〉という言葉があるはずがない。「悪女として生きる以外に、すなわち男を破滅させることのほかに生きる術を知らない女というものが、この世にはたしかに存在しているのだ」<sup>10</sup>

しかしながら、そうした女が〈悪女〉になるには、男と巡り合わなければならぬなどの条件が必要である。シモーヌ・ド・ボーヴォワールより『第二の性』で述べたようにな、悪女は悪女として生まれるのではなく、悪女になるのだ。眠る森の美女が目覚ますには王子様の接吻が必要なように、悪女として目覚めるには、それなりの資格を持った男が手を差し伸べる必要があると考える。

#### 4.1 男性側から<悪女>になる条件

では、どのような男が悪女と運命的な出会いによって、破滅に向かって激しく突進するのかと考えれば、条件としてまず向こう側（男性側を中心）の要素をまとめていく。

- ① 第一条件として、「価値」のある男であることが必要だ。詳しく言えば、地位、財産、才能、知力、美貌、未来性など、<悪女>という対象に、賭けるに値するだけの「賭け金」を有している男でなければならない。

『第二の性』で述べられているように、ホルモンの働きによる精神活動は肉体の一連の動作を支配している。このような「価値のある」男性が発する雰囲気は女性ホルモンの働きに影響を与えて、アマチュアの悪女に対しても非常に魅力的である。しかし、単にその「価値」のある男の共同所有者として共有している女性がプロの<悪女>とはいえない。プロの<悪女>とはこの「価値共同所有者」を踏み台にして、利用できる価値を全部手中に収める。

- ② 第二条件として、ある男にとってある女が悪女となるためには、まず、男のほうがある権力を掌握している。あるいは、<悪女>は男性（権力者）の周辺にいて自身が観力の関与することができる。（権力とは政治権力以外にも学問的権威なども含む。）

歴史上から見ると、権力や権威を手中にできるのは男性のほうが多い社会構造は変わっていないので、女性が権力の中心に近づこうと思えば男性のそばに付着していることは少なくない。<悪女>は男性に接近する際の手段がいわゆる「女性的魅力」であることは明らかであるが、反対にいえば、「権力なんてどうでもいい」と思っている女性でも、一旦権力者の妻や恋人となれば<悪女>の烙印を押される可能性がある。たとえ顔は見たことないがソタラテスの妻は悪女とか悪妻と言われることが多いし、ロシアの文豪レフ・トルストイは死に際に「決して妻を近づけるな」と言ったと伝えられており、ソフィア夫人もそうだろうし、もともと女優だった中江青もそうかもしれない。

- ③ 第三条件として、男のほうが、二人が運命の仕組んだ悪戯としか思えないような偶然によって出会うという要素も不可欠である。

ここでは確かに、人為的な出会いと気づいた男のほうから、金銭などの要求を簡単に手に入れることはできないだろう。

#### 4.2 女性側から〈悪女〉になる条件

『日本国語大辞典』に「悪女」については新しい意味で男を惹き付け、「魅力的な女」と解説しているが、悪女と言っても必ずしも魅力だけの女性ばかりではないと思う。ここでは、ある女性が〈悪女〉と呼ばれるのが女性側から次の条件が必要だとまとめる。

- ① 「美女に見える」雰囲気を持っている。いわゆる、「雰囲気美人」である。

現実においては男性の心をつかむのに、「美人」が絶対条件というわけではない。ほかに強力なセールスポイントがあることが当然だが、「見かけ」で第一関門を通過するために、美人ではない〈悪女〉は、本来なら美女のカテゴリからは外れるとして、いわゆる「雰囲気美人」であったのだろう。「美」は形態だが、色香などは雰囲気であり、対男性の場合には色香を発散させて、「ふくよかな美女」を演出すれば男は自制心を失った状態になる場合も少なくないである。

- ② 辞書的な意味で、〈悪女〉とは男が「賭け金」の全部を失ってもいいと覚悟するほどの魅力がなければならない。あるいは〈悪女〉は男が人生を棒に振ってもかまわないと思うほどの魅力を持たなければならない。

第二条件は文字通りの意味で、男としてはどのような理性を持って勝てるわけがない美貌を持たなければいけない。しかも女は自分が姿を見せさえすれば、それで男が陥落することを十分に承知しているのである。

男の前に〈悪女〉が現れるとき、「私は悪女よ、警戒しなさい」と教えるよ

うな姿をしていることはあまりない一方、少女のような純真で、あるいは貞女のような淑やかさを纏って、まずは男の警戒心を解くことから始めるのが普通である。そのため、<悪女>がいきなり悪女然とした妖艶さで登場したりすると、男は逆に虚を衝かれたかたちになって、虜になってしまうこともある。ここのところは、女性にはなかなかわかりにくい心理だが、「悪女みたいだから好き」、「純情そうな女性は嫌い」という男も確実にいるのだ。

- ③ 女は一定期間以上、男の関心を常に惹きつける魅力を持たなければならない。ようするに、魅力とスキの微妙な兼ね合いが必要である。

いくら出会いが宿命であろうとしても、すぐに男に飽きられてしまうようであれば、男の命を奪うまでには至らない。では、男の関心を常に惹きつける力とはなんなのだろう。それは、男を驚かす能力、男の意表をつく才能ではないかと思う。いわゆる、出会いの瞬間から、男をびっくりさせ続ける意外性を持たなければならないということである。

- ④ 演技のいいこと。アマチュアの悪女は目的なしに男を接近するので、バレルのがほぼない。一方、プロの悪女に対しては、ある目的を達成するために、上手な演技が必要である。

心理学者のフロイトは男女関係を心理学的に研究した結果、男性は自分に近づいてくる美しい女性に対して多かれ少なかれ警戒心を持っていると指摘した。特に成功した（すでに金銭・名誉などの「価値」を持っている）男性にとって、自分で抱擁した女性を簡単に信用することはできないとは言えるのだろう。しかしここで<悪女>がしなければならないことは、彼女たちの優れた演技を用いて一步一步で男の警戒心を取り除き、喜んで全力を尽くしてくれることである。

- ⑤ <悪女>は必ず男性との関係において自分自身の価値が計られて、いつでも自己形成を行う。

『第二の性』に述べたように、男性側から見る女性の「価値」は、実は人間

としての自分の重要性を高めることではなく、男性の要求に合わせるように自分を形作ることによって得られている。例えば、二十代の男性は友達の前で自慢できる美貌を持つ女を求めているが、結婚して間もない男性は、人生のパートナーを探すときに相手の家庭や職業などが優先に考える事項になる。人生が昇る四十代には、家の面倒も見つつ、自分の事業などについても相談できる賢内助がいる必要があるとは言えるのだろう。渡辺淳一の『愛人』の修子（経済的に自立し、気品のある人物設定）のような、男性の要求に応えるために、仕事外の時間を割いて茶道や花道をしたりして、身なりや髪型まで、男に満足してもらおうよう努力している。

まとめ：

・〈悪女〉になれるか？

ところで、男性側にも女性側にも、以上の条件をすべて満足すれば、どのような社会に〈悪女〉が生きているように思えるが、実際には、そうではない場合もある。たとえば、男尊女卑の観念が染み込んだアジア的儒教社会や、一夫多妻制のイスラム社会などでは、不倫物語はあっても、女が完全な主導権を握って男の鼻面を引きずり回す型の悪女物語は成立しないわけだ。あるのかもしれないが、少なくとも表面には出てきてない、あるいは残っていないだろう。

では、〈悪女〉になれる人は一体何を考えているのだろうか。

これを知るのには思っているより難しいような気がする。なぜなら、仮に悪女の自伝なものがあるとしても、彼女自身が悪女としての心理を自己分析するというようなことはまずありえないからである。あるいはその逆に、自ら悪女であると意識している女性がいたとしても、その自伝もただ自分の魅力という自慢話でしかなく、悪女の考えをたどるにはふさわしい資料ではないと思う。

そのため、〈悪女〉が男を失墜へと追いやる心理のメカニズムなどを知りたいなら、むしろ、〈悪女〉を上手に描かれる作家の手にゆだねたほうが賢明なのかもしれない。

上述のように、現実生活における悪女は多くの条件を満たす必要があるが、文学作品の中でも特に女性を主人公にした文学作品には悪女が頻繁に登場する。さらに推理小説には、たとえ松本清張の『黒革の手帖』や東野圭吾の『幻

夜』のように、女性の悪を手がかりに小説プロットを進めた推理小説も多い。しかし、文学作品の悪女と現実社会の悪女は同じものなのだろうか。あるいは文学作品に描かれている代表的な悪女像にはどのような特徴があるのだろうか。また、文学の中に悪女を作り出すという設定が、今後の文学創作の主流になるのではないかという問題点が、今後の検討内容としたい。

### 付記：

本研究論文は現在作成している博士論文「日本現代文学における〈悪女〉論」の一部として投稿するものである。

### 注：

- <sup>1</sup> 尚学図書（1982）. 『国語大辞典』 小学館. p28参照
- <sup>2</sup> 『大辞泉』（1995）. 小学館. p28参照
- <sup>3</sup> 新村出（1998）. 広辞苑第五版. 岩波書店. p29参照
- <sup>4</sup> 松村明（1999）. 大辞林第二版三省堂. p27参照
- <sup>5</sup> 山田忠雄（2005）. 新明解国語辞典第六版革装. 三省堂. p14参照
- <sup>6</sup> 歴史・文学作品中の悪女を研究するため、様々な意見や感想を集まる非営利機関である。「悪女研究所」のサイトを立ち上げ、さらに悪女の生き方など現実的なテーマについても検討している。
- <sup>7</sup> オースティン・ウォーレン, ルネ・ウェリック（1971）. 『文学の理論』（1980）. 筑摩叢書. p132参照
- <sup>8</sup> 田中貴子（1992）. 『悪女論』. 紀伊国屋書店. p10参照
- <sup>9</sup> 田中貴子（1992）. 『悪女論』. 紀伊国屋書店. p8参照
- <sup>10</sup> オースティン・ウォーレン, ルネ・ウェリック（1971）. 『文学の理論』（1980）. 筑摩叢書. p144参照

### 参考文献：

- <sup>1</sup> 堀江珠喜「ミステリー小説の美女いろいろ：比較文学的に考える」. 女性学講演会（2014-03）
- <sup>2</sup> 田中貴子（1992）. 『悪女論』. 紀伊国屋書店
- <sup>3</sup> 石原千秋（2009）. 『読者はどこにいるのか——書物の中の私たち』. 河出ブックス
- <sup>4</sup> 鹿島茂（2003）. 『悪女入門ファミ・ファタル恋愛論』. 講談社現代新書